

2021年9月NHK中央放送番組審議会

9月のNHK中央放送番組審議会は、13日(月)、NHK放送センター(ウェブ開催)において、15人の委員が出席して開かれた。

会議では、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	國土 典宏 (国立国際医療研究センター理事長)
副委員長	石戸奈々子 (NPO法人CANVAS理事長)
委員	秋田 正紀 ((株)松屋代表取締役社長執行役員)
	秋本 可愛 (株式会社Blanket代表取締役)
	石堂 真弘 (一般社団法人JA共済総合研究所参与)
	磯崎 功典 (キリンホールディングス(株)代表取締役社長)
	小沢 秀行 (朝日新聞社論説副主幹)
	尾上 紫 (日本舞踊家、女優)
	木村たま代 (主婦連合会事務局長)
	椎木 里佳 (株式会社AMF代表取締役社長)
	柴田 岳 (読売新聞大阪本社代表取締役社長)
	仲條 亮子 (グーグル合同会社執行役員/Youtube日本代表)
	花岡 伸和 (一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長)
	福井 烈 (公益財団法人日本テニス協会専務理事)
	安河内賢弘 (JAM会長)

(主な発言)

<放送番組一般について>

- 東京2020パラリンピックの競技中継がすばらしかった。中でも競泳や陸上の実況では、観戦に必要な情報を的確かつ適度に伝えており評価したい。パラ競技は障害の程度によってクラスが分かれるが、選手たちのハンディキャップについても適切に紹介していた。一方で、開会式中継では、式典の演出を詳しく説明しすぎていたと思う。式典の中のパフォーマンスの意図はことばがなくとも伝わってくるものだったし、観客が想像力を働かせて解釈することにも価値があると思うのでや

や煩わしく感じた。閉会式での解説は適度かつ自然でよかったが、アナウンサーの実況の一部にはやや押しつけがましさを感じた。コロナ禍に配慮したコメントも随所にあったが、式典についてはもう少しシンプルに中継すればよいと思う。

(NHK側)

開会式での実況について、もう少し視聴者の解釈に任せたほうがよかったのではないかという指摘は制作部局とも共有する。これからもより視聴者に届く情報の伝え方を考え続けていきたい。

(NHK側)

パラリンピックの競技中継については、オリンピックと同様、スポーツ中継として楽しんでもらうことを第一に制作した。評価いただきありがたく思う。開閉会式の中継で、どの程度内容を丁寧に説明するのか、そのバランスは難しく、視聴者からもさまざまな意見がある。今回は、子どもからお年寄りまで幅広い視聴者に伝わるよう、丁寧に解説することを心がけた。頂いた意見は現場に伝え、今後の番組制作に生かしていきたい。

- 8月24日(火)の東京2020パラリンピック「開会式」(総合 後7:58~10:53)を見た。選手たちの入場シーンでは、それぞれの国や選手の情報を丁寧に伝えておりわかりやすかった。一方で、開会式の演出については説明を加えすぎていたように感じたので、副音声などを活用して視聴者の好みに合わせてそれぞれ楽しめるようにするとなおよかったのではないか。ゲストの櫻井翔さんがこれからの社会のあり方についてコメントをしてしたのが印象に残った。障害者の暮らしやすさでは、日本は欧米と比較して遅れをとっていると感じる。人々の意識もまだまだ十分でない面が多いと感じている。今回の中継は、社会をよくしていこうというメッセージが感じられてとてもよかった。

- 東京2020パラリンピックについて、民放での放送があまりない中、NHKは総合テレビやEテレだけではなくBS1などで放送したほか、マルチ編成の活用やインターネットでの展開などあらゆる手段を尽くして競技を伝えており評価したい。パラリンピックならではのクラス分けや種目数の多さなど、視聴者に分かりやすく伝えるための苦労も多かったと思う。今大会の経験を生かし、次の大会の放送につなげてほしい。

- 東京2020オリンピック・パラリンピックについてさまざまなサービスでしっかりと伝えたことを評価したい。パラリンピックがここまで長時間放送されたことはこれまでになく、すばらしかった。特に、今大会はパラ競技の魅力が伝わるような工夫がなされており感心した。解説者だけではなく、実況のアナウンサーもルールや戦術を研究していることがよく分かったし、選手たちの能力の高さもよく伝わってきた。NHKの中継でパラ競技に興味を持った人も多かったのではないかな。
- 東京2020オリンピック・パラリンピックはNHKのさまざまなサービスで楽しませてもらった。オリンピックの開会式では多様性の認識が海外の一般的な見方とはかけ離れていることなど、さまざまな問題が露呈したと感じたが、パラリンピックの開会式と閉会式はダイバーシティ&インクルージョンを見事に表現しており、新しい時代の始まりを感じることができた。
- 9月10日(金)の首都圏情報 ネットドリ！「コロナ禍の東京大会 開催地の人々ひと夏の記録」を見た。東京2020オリンピック・パラリンピック閉幕後に大会に関するさまざまな問題を検証していた。多角的な取材で構成されており、よい番組だった。一方で、出演者のスタジオトークには一貫性が感じられなかった。また、大会開催期間中の新型コロナウイルスの陽性者と重症者数を示したグラフが紹介されていたが、大会の開催と陽性者数等の因果関係はまだ検証されていないので、適切ではなかったのではないかな。出演者の1人が、選手村のエアコンの扱いについて語っていたが、事実とは異なる話もあったように思う。このような情報については、より正確に伝えることを心がけてほしい。
- 8月14日(土)のNHKスペシャル「銃後の女性たち～戦争にのめり込んだ“普通の人々”～」を見た。出征兵士を見送るなど、地域で戦争と関わった「国防婦人会」に焦点を当てていた。一般の女性たちが戦争に協力させられていった状況がよく理解できた。国防婦人会のことを初めて知ったが、戦地に行っていなくても多くの人たちが戦争に巻き込まれていった事実には恐怖を覚えた。国防婦人会での活動には女性の社会参加という側面もあったという紹介があった。軍部によって女性の社会参加が利用されたという現実を示したことは、女性活躍の歴史を考えるうえでも意義があると感じた。

(NHK側)

国防婦人会についてはこれまであまり取り上げられてこなかったが、実際に活動をしていた方々の娘の世代が高齢に

なってきたこともあって、今回はこのテーマを掘り下げた。番組の取材で、国防婦人会が当時の女性たちの社会参加の場になっていたことが明らかになった。善意で活動に参加していた女性たちが次第に時代の波にからめとられ、利用されてしまったという事実を伝えることができた。

- 8月14日(土)のNHKスペシャル「銃後の女性たち～戦争にのめり込んだ“普通の人々”～」を見た。国防婦人会という、これまであまり取り上げられてこなかった切り口から戦争を考えるユニークな番組だった。当初は選挙権もなく“イエ”に縛られた婦人たちの社会参加の場だったが、次第に軍に利用され、戦争協力と愛国心強制の装置になっていく課程が丹念に描かれていた。

(NHK側)

3人の女性ディレクターが中心になって制作した番組だ。丁寧に取材を重ねたことで、新たな事実を伝えることができたと考えている。

- 8月6日に戦争に関連した番組が放送されなかったことがSNSなどでも話題になっていたが、その理由について知りたい。

(NHK側)

8月9日(月)にNHKスペシャルの新作「原爆初動調査 隠された真実」を放送した。東京2020オリンピックの開催期中は競技中継中心の編成とし、オリンピック終了後に原爆や戦争について考える番組を放送することとした。

(NHK側)

「NHKスペシャル」の新作は8月9日(月)に放送したが、8月6日(金)の深夜には過去に放送した原爆をテーマにした「NHKスペシャル」を3本連続で再放送し、NHKプラスでも配信した。今回の視聴者の声も参考に、時宜を得た編成を心がけていきたい。

- 8月13日(金)の終戦ドラマ「しかたなかったと言うてはいかんです」(総合後10:00～11:15)を見た。戦時中に生体解剖という許されない事件があったことは知っていたが、詳細は知らなかった。このドラマは史実に基づいたフィクションで

あるものの、実際の事件の詳細をうかがい知れる内容で戦慄を覚えた。冒頭の手術の再現シーンはとてもリアルに描かれていた。ヒューマンドラマとして主人公の思いや行動についてもさまざまなことを考えさせられる内容だったが、事件の背景や、10人以上いた関係者がなぜ生体解剖を止めることができなかつたかについても掘り下げてほしかった。医療の原点に関わる問題を考えさせられるドラマで、医師を目指す学生に見てほしい内容だと感じた。

(NHK側)

総合テレビでは75分版を、9月にはBSプレミアムで89分版を放送した。89分版はよりメッセージ性のある内容になっており、NHKオンデマンドで見ることができる。

- 戦争に関連した番組について、NHKは毎年かなりの数を放送しており、その努力を評価したい。これまでは戦争に至った背景など、歴史的事実の検証が多かったが、ことしは兵士の胸の内や市民の苦悩など人々の心をテーマにした、充実した内容の番組が多かったと感じた。後世に記録を残すという意味でも引き続き期待している。また、再放送も有効に活用していると感じた。良質な番組を積極的に再放送することは視聴者サービスとして素晴らしいので、この取り組みを継続してほしい。

(NHK側)

NHKプラスでの配信も念頭に、戦争関連の「NHKスペシャル」を集中的に再放送した。今後もさまざまな機会を捉え、テーマごとにまとめて再放送する取り組みを継続していきたい。

- まれにNHKプラスで視聴できない番組があるが、どのような事情があるのか。

(NHK側)

権利上の問題で、インターネットで配信できない番組もある。

- 9月11日(土)のNHKスペシャル「9.11 閉ざされた真相～遺族と国家の20年～」を見た。20年前におよそ3,000人が犠牲となったアメリカ同時多発テロ事件の背景について掘り下げた番組だった。実行犯の多くがサウジアラビア国籍だったことなど、驚きの事実を伝えていた。情報開示を求める遺族の要求をアメリカの歴代政権が拒否してきたことも驚きだった。アメリカとサウジアラビアが密接

な関係にあり、テロ事件後にはアメリカとサウジアラビアの武器の取引量が大幅に増えたことまで取材されていて感心した。国益のために多くのことが公開されずに隠されたままになっていることがよく分かった。NHKの取材力の高さを感じる番組だった。

(NHK側)

「9. 1 1」で家族を失った遺族たちが真相を知ろうと闘い続けてきたこの20年の道程に焦点を当てた番組だ。アメリカ軍が撤退したアフガニスタンでは、再びタリバンが政権を掌握する事態となっており、改めてこの20年について考えるきっかけとなる番組になったと思う。頂いた意見は現場に伝えるとともに、今後の番組制作に生かしていきたい。

- アフガニスタン情勢に関する報道についてだが、現地で大きな動きが出たときに素早く伝えることに苦労しているのだろうと感じている。例えば、8月16日(月)のNHKのニュース項目で「アフガニスタン大統領が突然出国 タリバンが政権移行迫る」としていたが、何をもって「突然」としたのかが明確ではなかった。一報が海外の報道機関と比較するとおよそ1日以上遅れた報道だったと思う。刻々と事態が変化する中で、報道機関としてどのように動くべきか苦労していることと思う。一方で、しっかりと情報にキャッチアップし、特集番組などで丁寧に伝えていることは、NHKの強みであり素晴らしい。これからも海外の情報を正確かつ迅速に伝えてほしい。

(NHK側)

アフガニスタンについては、指摘のとおり目まぐるしく情勢が動いている。状況の変化が速いので、情報を伝える時点でそれが正しいのかという確認も含めて、慎重に報道している。今後もアフガニスタン情勢については正確な情報を迅速に伝えることを心がけたい。

- 9月10日(金)の時論公論「アメリカ同時多発テロ20年」など、アフガニスタン情勢や「9. 1 1」をテーマにした番組が数多く放送されていた。いずれの番組も、NHKの取材力が存分に発揮された意欲的な内容ですばらしかった。アフガニスタンの最新の映像とともに、数々の問題やその背景について分かりやすく解説しており感心した。アフガニスタン情勢については、人道的な観点も含めて引き続き丁寧に伝えてほしい。

- 8月10日(火)のフェイク・バスターズ「新型コロナワクチンと誤情報」を見た。NHKが伝えるニュースをいかに正しい情報として受け取ってもらうかについての取り組みを紹介していた。ミスリードを生まない表現や文章の工夫のほか、ニュースの一部が切り取られて拡散されてしまっても誤解を生まないよう細心の注意を払っていることがよく理解できた。この番組では、これまでインターネット上の情報の問題点をテーマにすることが多かったが、今回はNHKとして何ができるのかについて正面から伝えており興味深かった。また、9月6日(月)の「NHKニュース おはよう日本」ではSNSなどを展開しているインターネット系企業が誤情報とどのように向き合っているのかについて取り上げていた。新型コロナウイルスに関連する誤情報がいかに巧妙に生み出されているのかを丁寧に伝えていた。「こびナビ」という新型コロナウイルスやワクチンに関する正確な情報を届ける医療関係者のプロジェクトと動画投稿サイトが協力し、誤解を招く動画が数多く削除されていることが紹介されていた。このような取り組みはこれまであまり取り上げられていなかったもので、よかったと思う。各メディアが協力して科学的な根拠に基づいた正確な情報を正しく伝える必要があることがよく伝わってきた。

(NHK側)

新型コロナウイルスの感染が拡大し、ワクチンに関する誤った情報があふれる中で、正確な情報を伝えることが極めて重要だと考え、NHKの取り組みを紹介した。引き続き正しい情報を伝える報道に取り組みたい。

- 8月21日(土)の「アニメ・イン・ザ・ダーク」(総合 後 6:05~6:45)を見た。視覚障害者たちが認識している世界をアニメで表現するとともに、その制作のプロセスを伝える番組だった。この番組を通して、自分自身がこれまで視覚にとらわれすぎて、世の中をしっかりと認識していなかったのではないかと感じた。目で見るとはどういうことなのかについて考えさせられた。視覚がふさがれているからこそ見えてくる世界があることもよく理解できた。このアニメの制作にあたって、監督は対話の重要性にたどりついていて、世界の捉え方は人それぞれで、視覚の有無に関わらずそれぞれが感じている世界は異なっている。対話をすることでそのことに気づき、互いを認め合うことができると感じた。さまざまな人が共感し合えるきっかけになるような番組制作と、共生社会の実現に資するようなテレビの未来に期待したい。
- 8月29日(日)の目撃! にっぽん「東京宿屋ものがたり〜オリンピックに見たも

のは～」を見た。東京の下町にある老舗旅館に密着した番組だった。1964年の東京オリンピックの際には宿泊客が押し寄せたが、今回のオリンピックではコロナ禍でキャンセルが相次ぎ、苦境に立たされているとのことだった。旅館を営む家族を2か月にわたり取材し、経営者の苦悩や新たな挑戦などを視聴者目線で分かりやすく伝えていたと思う。新型コロナウイルスの感染拡大の影響であらゆる業種が苦境に立たされていることが報道されているが、コロナ禍に立ち向かう新たな工夫を取材して伝えることは困っている人たちへのヒントになる。その意味でも、とてもよい番組だった。

○ 9月4日(土)のアナザーストーリーズ 運命の分岐点「落語を救った男たち 天才現る！古今亭志ん朝の衝撃」(総合 後 11:55～5日(日)前 0:39)を見た。戦後、衰退の危機にあった落語界で、入門から5年たらずで真打ちに抜てきされた志ん朝さんのエピソードが数多く紹介されていた。偉大な父を持つことに悩みながらも、圧倒的なキレやスピードを武器に芸術的な落語を完成させたことがよく伝わってきた。ライバルの立川談志さんとの逸話も興味深かった。志ん朝さんの活躍をきっかけに落語界が復活していく様子がよく分かり、印象に残る番組だった。

○ 9月6日(月)のうまいッ！「うまみ濃厚！赤身肉の女王！ダチョウ～茨城・筑西市～」を見た。ダチョウの肉という珍しい食材を取り上げていた。「うまいッ！」は日本各地の食べ物の魅力を紹介する情報番組で、生産者たちの努力や工夫を丁寧に伝えている。さまざまな地域の食材を取り上げ、関連する情報を幅広く取材し、食の魅力を分かりやすく伝えていてすばらしい。司会でお笑い芸人の天野ひろゆきさんと塚原愛アナウンサーのコンビも好感を持てる。コロナ禍で取材の苦労も多いかと思うが、引き続き期待したい。初回放送が平日の昼の時間帯に、再放送が週末の早朝に編成されていることも、幅広い視聴者に訴求するのでよいと思う。

(NHK側)

「うまいッ！」はさかのぼると「明るい農村」から続く歴史のある番組だ。明るい雰囲気や地域の食材の魅力を伝えることがこの番組の使命だと考えている。NHKは地域情報の発信に力を入れているので、今後も地域の情報をしっかりと取材し、全国に伝えていきたい。

○ 9月9日(木)のクローズアップ現代+「その校則、必要ですか？ルール改革の最前線に密着！」を見た。本来、規則はそのコミュニティが健全かつ持続的に発展するためにあるものはずなのに、社会が変化し、ルールがかえって当初の目的を

阻害する存在になってしまっていることは数多くあると感じている。制服がなくなると経済的に苦しい家庭の生徒が困ることなど、必ずしも物事を多数決で決めるのがよいとは限らず、議論を継続して対話を重ねる必要があることなど、実際に校則を変えようとする中で子どもたちは今まで考えたことがないものに気づいていた。校則に限らず、変えられないと思うようなことでも実際には変えられるという、重要な示唆を与えてくれる番組だった。NHKには今後もさまざまな問題を提起し、よりよい社会の実現に向けた取り組みを期待したい。

- 9月8日(水)のクローズアップ現代+「目指せ！世界標準のバリアフリー▽東京2020大会の先へ」を見た。新国立競技場の設計は、障害のある人をはじめさまざまな立場の人が設計に参加する「インクルーシブデザイン」のプロセスを経ていることを紹介していた。発達障害など他者から見えにくい障害を持つ人たちへの配慮もなされているとのことだが、国内ではまだ珍しいケースだ。この知見を全国各地の公共施設に伝えることが使命だというコメントもあったが、その役割をしっかりと果たした番組だと感じた。心のバリアフリーについても言及されていたが、この問題は簡単ではなく、ハード面を整えるほど、心のバリアが高まってしまうという側面もある。どのような社会が本当に豊かな社会なのかを考えさせられる番組だった。健常者も障害者もない社会の構築に向け、他者への理解を深め、対話の場を設けるような役割をNHKには期待したい。

(NHK側)

さまざまな社会的課題が解決に向かうよう、議論のきっかけとなる番組を放送することは公共メディアの重要な役割の一つだと考えている。インターネットなども活用しながら、引き続きこのような課題と向き合っていきたい。

- 9月10日(金)のLIFE！～人生に捧げるコント～秋「杉咲花、風間俊介、和牛・川西、豪華キャスト集結！」を見た。以前から「LIFE！」は好きな番組でよく見ているが、ここ数年の放送で最もよかったと思う。思いきり笑うことはとても大切で、その機会を与えてくれる貴重な番組だ。引き続き期待したい。
- 8月8日(日)の東京2020オリンピックの閉会式の時間は、台風9号の日本列島への影響が心配されていたが、総合テレビでの中継は午後8時49分から9時23分までの間、閉会式をサブチャンネルで放送し、メインチャンネルでは台風関連のニュースを伝えるという判断がなされていた。人命を最優先に考えるNHKの報道姿勢が伝わってきて好感を持った。

- 9月13日(月)の「NHKニュース おはよう日本」を見た。ミャンマー情勢の話題を扱おうとしたところで、将棋の藤井聡太二冠のニュースに切りかわった。ミャンマー情勢に関するニュースが減っていると感じているので残念だった。一方で、「NHKスペシャル What's Happening in Myanmar?」というホームページでミャンマーの情報がまとめて伝えられているのは、すばらしい。このような取り組みを継続してほしい。

(NHK側)

北朝鮮の巡航ミサイルに関するニュースが速報で入ってきたことで、準備していたニュースのオーダーを急きょ変更した。ミャンマーについてのニュースは5時台に一度伝えていたため、藤井聡太二冠のニュースを生かすという判断をしたのだが、違和感のある放送になってしまった。ミャンマー報道は重要であり、引き続きしっかりと伝えていきたい。

- 東京2020オリンピック・パラリンピックの放送では、台風の接近時にはマルチ編成を活用してニュースを伝えるなど柔軟な対応がなされており、緊急報道の重要性がしっかりと考えられていると感じた。一方で、定時の「NHKニュース」が短縮されたり、放送開始時間が少しずれたりすることがあった。オリンピック・パラリンピックに対する視聴者の期待が高いことも分かるが、さまざまな事件や災害も起こっているため、ニュースの扱いは慎重に考えてほしい。

(NHK側)

「NHKニュース7」などの基幹となるニュース番組については、東京2020オリンピックが始まってすぐから定時性を保って放送してきた。オリンピック中継によって定時のニュースを短縮した場合でも、新型コロナウイルスや災害などの重要なニュースは優先して伝えることを心がけた。頂いた指摘を踏まえ、よりよい編成を考えていきたい。

- 7月31日(土)のETV特集「ドキュメント精神科病院×新型コロナ」を見た。精神疾患のある新型コロナウイルスの患者を受け入れている病院に密着したドキュメンタリーだった。衝撃的な内容で、新型コロナウイルスの治療の問題だけでなく、日本の精神医療の実態を伝えていた。病院関係者が、満足なケアを行えない病院であっても患者の唯一の居場所になってしまっていると語っていて考えされ

られた。このテーマについては、引き続き取り上げ、現実を伝え続けてほしい。

- 8月14日(土)のE T V特集「ひまわりの子どもたち～長崎・戦争孤児の記憶～」を見た。戦争孤児施設の寮長であった餅田千代さんがどのような教育を通して孤児たちを救おうとしたのかを伝える内容だった。当時の孤児たちが餅田さんの思い出を語っており、餅田さんの人柄がよく伝わってきた。
- 8月28日(土)のE T V特集「“玉砕”の島を生きて～テニアン島 日本人移民の記録～」を見た。集団自決に追い込まれ、自らの子どもに手をかけたことなど、聞くに堪えないような衝撃的な事実が次々と語られるドキュメンタリーだった。このような事実をしっかりと記録に残すことは重要だ。当事者たちの多くはすでに亡くなられており、過去の映像も用いて貴重な証言を伝えていた。NHKには多くの映像資産があると思うので、今後も有効に活用して番組を制作してほしい。

(NHK側)

意見を頂いた「E T V特集」は3本とも長期にわたって取材を進めてきたものだ。「ドキュメント精神科病院×新型コロナ」は、コロナ禍以前から精神科医療の課題について継続的に取材を進めており、この番組につながった。「ひまわりの子どもたち～長崎・戦争孤児の記憶～」については、昨年放送したE T V特集「“焼き場に立つ少年”を探して」を制作する中で明らかになった餅田さんの物語を伝えた。今後も戦争の記憶をつなぐ番組を制作していきたい。また、「“玉砕”の島を生きて～テニアン島 日本人移民の記録～」のように、映像資産を活用して後世に伝えるべき歴史を残す取り組みも継続していきたい。

- 9月3日(金)のにっぽんの芸能「親子でえがく舞踊の情念 舞踊“日本振袖始”」を見た。コロナ禍で伝統芸能に接する機会が少なくなっている中、日本舞踊について取り上げた番組で評価したい。「にっぽんの芸能」は番組公式のインスタグラムを展開するとよいのではないかと考えている。NHKは映像がすばらしく、今回の番組では着物の生地までとても美しく映し出されていた。着物やかつらなど、職人たちの技を紹介するには、画像主体のSNSが適していると考えている。若い世代に伝統芸能を伝える意味でも検討してほしい。

(NHK側)

SNSでの展開が成果を挙げている番組もある。頂いた意見は現場にも伝えたい。

- 9月7日(火)の先人たちの底力 知恵泉「福祉の世界に新たな風を！小倉昌男」を見た。宅配便を生み出した経営者の小倉昌男さんが、当時の障害者雇用のあり方に課題意識を持ち、待遇を改善させようと福祉の世界に経営の考え方を広めたストーリーを紹介していた。先人たちの知恵を分かりやすく学べる番組でとてもよかった。津田塾大学客員教授の村木厚子さんをゲストに迎えたこともすばらしかった。村木さんが厚生労働省時代の小倉さんとのエピソードはとても興味深く、小倉さんの取り組みが意義深いものであることがよく分かった。番組の冒頭で1964年に行われた東京パラリンピックの映像とともに、海外のパラ選手は大半が就労しているのに対し、日本のパラ選手は多くが入院患者であるという紹介があった。この番組では東京2020パラリンピックについては触れられていなかったが、パラ選手たちの生き生きとした姿が報道されている。日本社会はよい方向に変化している面もあるが、まだまだ課題も多い。先人たちの知恵を生かしてこれからどうすべきかということについても言及があるとなおよかった。

(NHK側)

障害者雇用についてはまだまださまざまな課題があると考えている。引き続き「ハートネットTV」などの番組でこの問題を掘り下げて伝えていきたい。

- 9月13日(月)にスタートした「ワルイコあつまれ」(Eテレ 前8:25~8:55)を見た。「新しい地図」の3人が出演している番組で、今回はイントロダクションのような内容だった。今後は歴史や芸能などさまざまなテーマを扱う教育番組になるとのことだ。今後の3人の活躍に期待したい。

(NHK側)

「ワルイコあつまれ」はあえて予告をせずに初回放送した。新しいコンセプトの教育バラエティー番組で、「新しい地図」の3人が熱意を持って取り組んでいる。引き続き期待してほしい。

- 9月5日(日)のBS1スペシャル「市民が見た世界のコロナショック 7月~8月編」(BS1 後11:00~11:49)を見た。世界各地の市民が自撮り映像でコロナ禍の今を見つめるシリーズで、とても興味深かった。アメリカでは子どもたちへのワ

ワクチン接種をめぐる親たちの本音や葛藤、イギリスでは妊娠や出産を控えた女性たちの不安、イタリアとニュージーランドでは観光産業の現状など、各国の状況がよく分かった。日本の現状を考えるうえでもとても参考になる内容だった。子どもたちや妊婦がワクチンを接種すべきかについては日本でも切実な問題で、考えさせられた。イタリアでは観光客の激減で、観光産業に携わる人たちが厳しい生活を強いられる一方、観光客の増加で不利益を被っていた住民たちからは歓迎されている様子を見て、海外でも日本の観光地と同じような事例が生じているのだと感じた。

(NHK側)

新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた時期に、海外の実情を伝えたいと考えてスタートした番組だ。実際に撮影に行くことは叶わない中、自撮りの映像を活用することで身近な視線でコロナ禍の実態を映し出そうと考えた。

- 9月6日(月)のスポーツ×ヒューマン「戦い抜いて ふたり バドミントン フクヒロペア」を見た。東京2020オリンピックでの活躍が期待された福島由紀選手と廣田彩花選手のペアだが、結果は準々決勝で敗退となった。オリンピックでメダルを獲得するなど、終了後もメディアに取り上げられる選手はわずかで、伝えられない出来事やアクシデントがあつて期待通りの活躍ができないアスリートのほうが多いのが現実だ。廣田選手もそんな1人で、大会直前に右膝前十字じん帯断裂の大けがをした。オリンピックが1年延期になっていなければ、おそらく違った結果になっていたかもしれないが、スポーツには絶対ということは無い、とうことを再認識させられた。思いどおりのプレーができないながらも、最後まで笑顔で戦い抜いたフクヒロペアの吹っ切れた姿にすがすがしさを感じた。華やかな舞台の裏に、悲喜こもごものドラマがあるのがスポーツであることを改めて感じる番組だった。

(NHK側)

フクヒロペアについては、7月18日(日)に放送したNHKスペシャル「逆境 その先へ“最強”日本バドミントン」で東京2020オリンピックに臨むまでの過程を伝えた。廣田選手はその時点で大けがをしていたが、オリンピックを経て手術が終わり、再び歩みだすまでの姿をこの番組で伝えた。これからもさまざまなスポーツドキュメンタリーの制作に取り組んでいきたい。

- 9月3日(金)の「結～京都 花街の片隅で～」(BSプレミアム 後10:00～10:59)を

見た。コロナ禍のいま、舞妓さんたちが何を思うのかについて取材した番組だった。92歳の髪結師の女性が紹介されていたが、心を込めて舞妓さんたちの髪を結う姿や、適度な距離を保った会話にプロ意識の高さを感じた。92歳とは思えない手さばきや、舞妓さんの話を聞く様子から、伝統を陰で支えている人たちの大切さを改めて感じた。一つのテーマについてじっくりと伝える番組で味わい深かったが、髪結師の女性がどのような人生を歩んできたのかをもう少し知りたかった。また、番組後半はやや冗長な印象を受けた。

- 9月4日(土)の決戦！タイムリミット「芥川賞・直木賞の舞台裏」(BSプレミアム 後7:30~8:59)を見た。芥川賞・直木賞の候補作が発表された6月11日(金)から、受賞作が決まる7月14日(水)までの動きを追ったドキュメンタリーだった。作家だけでなく、出版社の担当編集者や書店、印刷・製本会社など、さまざまな関係者のエピソードで構成されていて、本好きにはたまらない内容だった。現在の出版業界をめぐる厳しい現実も多角的にあぶり出されていた。直木賞候補の作家5人は全員登場したが、芥川賞候補の作家が出てくる場面がそれほど多くなかったのは少し残念だった。

(NHK側)

取材のうえでさまざまな制約があったこともあり、今回は直木賞の候補者を中心に扱った。頂いた意見は現場に伝えるとともに、今後の番組制作に生かして行きたい。

- NHKはT i k T o kの公式アカウントを展開していないようだが、とてももったいないと感じている。このSNSでNHKを検索すると、NHKに対するネガティブな情報が真っ先に出てきてしまう。若い世代に悪い印象が定着しかねないし、若者向けのブランディングを考えるうえでも望ましくないと思う。

(NHK側)

ライブ配信プラットフォームは若い世代を中心に、多くの人に使われており、NHKがどのように活用するかは課題だと認識している。一方で、プライバシーの問題など難しい課題もあり、引き続き検討を重ねていきたい。

(NHK側)

巨大プラットフォームとの向き合い方は課題だと考えている。公式アカウント、チャンネルの開設には、編集権や情

報セキュリティーの観点も含めて判断している。さまざまなリスクをしっかりと見極めたうえで、どのように活用すべきか検討していきたい。

- 東京2020オリンピック・パラリンピックに関する放送は全般的に楽しめたが、インターネットとの連携や役割分担をもっと意識してもよかったのではないか。オリンピックの閉会式やパラリンピックの開会式では、総合テレビの放送とは別に手話通訳が付与されたものがEテレで放送されていた。手話通訳者が画面に常駐していると映像が見づらくなってしまいうことに対応したのかもしれないが、多様な共存共生社会を実現するためには、互いに少しずつ不便を受け入れていくことが必要だろう。多様性をテーマに打ち出している大会なのだから、NHKは多様性の実現に向けて、映像が一部見づらくなることを断わってでも、総合テレビとEテレで分けるのではなく、総合テレビで手話付きの放送をすべきではなかったか。

(NHK側)

今回の中継ではろう者の第1言語である手話を初めて取り入れた。手話通訳者の手元だけでなく全身を映すため、式典の映像を縮小して伝えることにした。新たな取り組みだったこともあり、さまざまなことを想定して制作したが、視聴者からも大きな反響があった。多様な意見を踏まえて、よりよい放送の実現に向けて検討を重ねていきたい。

- 8月10日(火)のフェイク・バスターズ「新型コロナワクチンと誤情報」を見た。ワクチンに関するデマや誤情報について、医療の専門家だけでなくコミュニケーション論や心理学の専門家も加えて伝えており、番組の構成がとてもよかった。番組ではメディアとファクトチェックの緊張関係が必要だという指摘もあって、NHKの報道自体が批判の対象になり得る内容で、本気と覚悟が感じられた。一方で、この番組を見てよい番組だと思う人は最初からデマを信じていない人であり、そうでない人はこの番組を見ても非難するだけだろうし、そもそもこのような番組を見ないというところに構造的な問題があると感じた。
- 8月7日(土)のE TV特集「日本の原爆開発～未公開書簡が明かす仁科芳雄の軌跡～」を見た。第二次世界大戦中に原爆開発に従事した物理学者の仁科芳雄さんの研究活動について、新しく見つかった史料を中心に分析した番組だった。とても興味深く、科学史研究としても貴重な内容だった。多くの視聴者が楽しめる内容ではないかもしれないが、このような番組は後世に残すためにも必要だと思う。仁科

さんと陸軍の共同研究は、当初は新しいエネルギー源の開発が目的だった。しかし戦局が悪化するにつれて、爆弾開発に目的を変更させられてしまった。軍との共同研究の難しさを象徴しており、考えさせられた。

(NHK側)

戦争に巻き込まれていく中で、本来の科学の理想を失っていく姿は現代にも当てはまると考えている。仁科さんは戦後、日本学術会議の自然科学部門長になった際に「科学と軍事は距離を置くべきだ」というメッセージを発したが、その意味が伝わる番組になったと考えている。

NHK編成局
番組審議会事務局